

ズ78, p.11) の具体的な中身としてもなかなかよいのではなからうか。

外力にドライブされるだけでなく……などと格好を付けてみたものの、そういう考えに至った経緯を紐解いてもやはり、こここのところの一連の事象の影

響に他ならず、結局のところ、皆さんに突いてもらうことで新しいことを思いつく質であることもかなり確実な経験的事実である。光と物質の話が好きなのも、外力に駆動される系としての親近感から来ていることかもしれない。

そのように考えると外力は本質的に重要で、これからも突き甲斐がありそうだなと思ってもらえるよう、一風変わった職場から小さくてもキラリと光る一風変わったアイデアを出し続けていかななくてはと思う。

分子研出身者の今 ■ 受賞報告



鹿野 豊 慶應義塾大特任准教授に第14回日本物理学会若手奨励賞

この度、第14回日本物理学会若手奨励賞を受賞致しました。本受賞は、「離散時間量子ウォークを用いた量子シミュレーションの理論の確立」に関する研究業績を評価していただいたものです。業績の大半は分子研に着任前の数物理的な仕事であり、着任時の主要業績の一つでもありました。評価の固まっていない中で、分子研にはこれらの業績をいち早く評価していただき大変感謝しております。更には、本研究領域を牽引する国際ワークショップを毎年、世界各地で開催しており(2回目は分子研で開催)、2020年1月のマルセイユで9回目を迎えることができました。

分子研を去り、東京大学先端科学技術研究センター、慶應義塾大学大学院理工学研究科と現在は3回目の特任准教授として働いております。研究に関しては、分子研離任後、昨今、産業界からの注目度も高い「量子コンピュータ」などを含んだ量子技術に関する仕事に関わるようになりました。特に、量子コンピュータに関する仕事は「計算の限界を物理法則によって定める」という学術的な目標の他に、学術分野から産業界までの方々が使いたくなるような道具としての高速な

コンピュータを作り上げるという使命もあります。私は分子研着任時に『今まではコンピュータを使った計算というのをほとんどしてこなかったため、分子研の周囲の方がよくやられているような巨大な計算機による結果やインターネット上に広がる膨大なデータベースを見ていると「解析解がどれだけの意味があるのか?」といった疑問に答えなければならないと思うようになりました。』(分子研レターズ66 31ページ)と寄稿し、5年間にわたる分子研での研究生活を通じて、ただ闇雲に速度・精度をあげた計算・計測をするのではなく、目的に応じて道具をきちんと使い分け、巧みに組み合わせていくことが必要であると気づくことができました。これらの考えは、新しい学問分野の形成を目指してきた分子研の先輩・同僚・後輩たちから学び取ったものであり、その中で独立した研究室を主宰しながら考え抜いてきたものであります。更に、産学連携活動を行うことを通じて、基礎学問からビジネスの世界においても共通して同様の考えが重要ではないかと思うに至りました。

日本国内で基礎的な学問をするための拠り所である分子研を去り、約3年が経ちました。arXiv:2001.02844



撮影：荻原 美津雄

鹿野 豊 (しかの・ゆたか)

2012年2月に分子研特任准教授(若手独立フェロー)として着任。2017年4月より東京大学先端科学技術研究センター特任准教授として転出(JST ERATO中村巨視的量子機械プロジェクト研究推進主任)。2018年4月より慶應義塾大学大学院理工学研究科特任准教授に着任。同大量子コンピューティングセンター研究員兼務。

などの現在行っている研究の多くが分子研時代に勉強してきたことに立脚することとなり、正直、自分自身でも驚いております。今後も分子研の息吹を感じながら自分自身の学問体系を創りあげていきたいと思っておりますので、ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。